

障害者・高齢者の性の問題を考える場合、障害者・高齢者の社会的立場、自己表現と自立、男性と女性の役割といった社会的問題への認識と対応が必要である。同時に、多くの障害者・高齢者がもっている性機能障害に対して、これらを治療あるいは代償するという医学的対応も検討しなければならない。この特集では、これら性の問題に関する実態調査と対応について最新情報を取り上げた。

■ 障害をもつ人達が直面している性の問題をどう捉えるか

日本人は「性」を性行為や生殖、ついで子供の養育を含んだ経済的自立の問題として認識しがちである。その結果、これらの事柄をこなせない重度障害者は、「性を持たない存在」として扱われがちである。しかし性には「セックス」だけではなく「セクシュアリティ」という概念がある。後者は人間関係やコミュニケーションに関する重要な要素で、重度障害者が対応できる事柄でもある。この観点から重度障害者も「性をもつ者」として認識されるべきである。(谷口明広氏, 841 頁)

■ 脊髄損傷者は性をどう考え、今、何を必要としているか—意識調査から

脊髄損傷者の性に関する意識は、合併症治療技術の進歩や社会環境の整備、および医療者の対応に影響されている。脊髄損傷男女 61 名から、性機能、性生活・結婚・妊娠などへの関心、性に関する知識などの質問回答を得て、性に関する意識が男女や既婚・未婚の違いによって異なるあり様を述べ、その原因などを考察している。(萩原美和氏ら, 847 頁)

■ 脊髄損傷者および二分脊椎者の性機能障害にどう対処するか

脊髄損傷者の性機能障害を、①異性との人間的関わり、②性欲、③勃起、④性交、⑤射精、⑥快感、⑦受精、⑧妊娠と分娩の問題に分けて概説し、さらに主な問題に対する泌尿器科的対応を述べている。後段では、成人二分脊椎者の性機能に関する調査結果を述べている。脊髄損傷および二分脊椎にそれぞれの特徴があるものの、性機能に関しては、ともに女性より男性に強い障害が認められた。(石堂哲郎氏ら, 855 頁)

■ 関節リウマチ患者の性生活の実態を調査し、その対策を考える

慢性関節リウマチに罹患した女性の関節疼痛や可動域制限は、ADL や家事動作だけでなく性生活への影響も大きいはずである。しかしほとんどの医療者が性生活上の問題に立ち入ることを避けるため、実態が把握されることは少ない。平均年齢 41.1 歳の既婚女性関節リウマチ患者 91 名から、性生活に関する質問への回答を得て実態を分析し、人工股関節置換術を含むいくつかの対策を紹介している。(吉野慎一氏, 861 頁)

■ 糖尿病性インポテンスを中心に、その病態と対応の仕方を紹介

糖尿病男子におけるインポテンス(勃起不全)は健常人より高頻度であるが、実際に治療を希望して来院する患者は少ない。糖尿病性インポテンスは、心理的要因と神経障害や血管障害などの器質的要因が合併したものである。そこで器質的要因の診断と治療手段、さらに予後や治療上の問題点が解説される。(高橋良当氏, 865 頁)

■ 高齢者の性の調査から、今後を展望する

人生 80 年の時代を迎えて、「高齢者にも性愛の希求があるのだ」という認識が一般のものとなり始めている。そこで 60 歳以上の男女 428 人を対象に調査した結果、高齢の男女とも異性への関心は高率に保持されていた。しかしながら性的要求や異性を好きになる感情には性差が明らかで、男性に強く残されていた。女性の場合、異性への関心は精神性に重きが置かれていた。(荒木乳根子氏, 869 頁)